

昔むかし、あるところに、ふたりの騾馬ひきがいました。ふたりは、何頭もの騾馬をひいて、いつもいっしょに旅をしていました。ひとりには、神さまを信じていて、もうひとりには悪魔あくまを信じていました。神さまを信じている騾馬ひきをマコトと呼び、悪魔を信じているほうをワルと呼ぶことにしましょう。

ある日のこと、旅をしながら、ワルがいました。

「おれは、いざというとき助けてくれるのは悪魔だと思うよ」

マコトは、

「いや、助けてくれるのは神さまだよ」といいました。

「じゃあ、賭けをしよう。道で会った人に、どっちが正しいか答えてもらうんだ。賭けに勝ったほうが騾馬を一頭もらうことにしようじゃないか」と、ワルがいました。

そこへ、黒い服を着た騎士きしが馬に乗って通りかかりました。ふたりはさっそくどちらが正しいかたずねました。黒い騎士は答えました。

「いざというとき助けてくれるのは、もちろん悪魔さ」

ワルは、

「そら見ろ」といって、マコトから騾馬を一頭取りあげました。マコトは、

「そんなはずはない。もういちど賭けてみよう」といいました。そこへ、白い服を着た騎士が馬に乗って通りかかりました。白い騎士は、

「いざというとき助けてくれるのは、悪魔に決まってるじゃないか」といいました。ワルはまたマコトの騾馬を一頭取りあげてしまいました。

こうして、ふたりは、出会った人たちに次つぎつぎたずねました。そして、みんながみんな「いざというとき助けてくれるのは悪魔だ」といいました。とうとうマコトは、騾馬をぜんぶワルにとられてしまいました。それでもマコトはいいました。

「でも、おれは、やっぱり神さまが助けてくれると信じているよ。この両目を賭けたっ
ていい」

ワルは、

「よしきた、それならもういちど賭けよう。おまえが勝てば騾馬をぜんぶ返してやるよ。
おれが勝てば、おまえの両目をいただこう」といいました。

そこへ、緑の服を着た騎士が通りかかりました。緑の騎士は、いいました。

「簡単なことさ。助けてくれるのは、悪魔に決まっている」

こうして、ワルはマコトの両目をえぐり取り、目の見えないマコトを荒野こうやに置き去りにして行ってしまいました。

マコトは、手探りてさぐであたりを歩き回っているうちに、洞穴ほらあなの入り口を見つけました。洞穴の中には、いちめんに茂みしげが生えていたので、マコトはその茂みの中に横になって一夜を過ごすことにしました。

夜中になると、何かがたくさんやって来る音がしました。マコトは、茂みのおくにかくれました。洞穴に入って来たのは、悪魔たちでした。ここは、世界じゅうの悪魔が集まる場所だったのです。

大魔王だいまおうが、悪魔たち一人ひとりに向かって、今日はどんな悪いことをしたかたずねました。ひとりの悪魔がいました。

「わたしは、黒い騎士や白い騎士、緑の騎士にすがたを変えて、神を信じているひとりの驃馬せうまひきを、何度も賭けに負けさせました。しまいには、両目まで取ってやりました」
大魔王は、

「よくやった」とほめました。「そいつは、二度と目を取りもどすことはできないぞ。失くした目のくぼみに、この洞穴の入り口に生えている薬草の葉を二枚乗せないかぎりはない」

悪魔たちは、

「はっはっは。あの薬草の秘密ひみつを人間がどうして知ることができよう」と笑わらいました。

マコトは、茂みのかげでふるえていましたが、これを聞くと、うれしくて天にも昇のぼる思いでした。

悪魔たちは、次つぎに自分の手柄てがらを話しつつげました。そして、最後のひとりがいいました。

「わたしは、ロシアの皇帝こうていの娘むすめのどに魚の骨をつき刺さしてやりました。皇帝は、骨を取ったものに金貨きんかをやると約束やくそくしましたが、だれにも取れるはずがない。というのは、娘の部屋のバルコニーバルコニーになっているすっぱいぶどうを三つぶ、しばって飲ませればいいんだが、だれもそんなことは知らないんですから」

「もっと小さい声で話せ」と、大魔王はいいました。「茂みに耳あり、石に目ありという

からな」

夜明け前に、悪魔たちは去っていきました。

マコトは、茂みのおくから出てきて、手さぐりで薬草を見つけると、目のくぼみに乗せました。するとたちまち、物が見えるようになりました。マコトは、さっそく、ロシアの皇帝のもとへと旅立ちました。

ロシアの宮殿では、お医者というお医者が、お姫さまの周りに集まっていました。そこへ、驟馬ひきのマコトが、ぼろぼろの服を着てみすぼらしいかっこうで入ってきました。それを見てみんなは笑いました。けれども、皇帝はいいました。

「ここまで手をつくしたのだから、この男にもやらせてみよう」

マコトは、お姫さまの部屋のバルコニーに出てみました。すると、ほんとうにすっぱいぶどうがなっていました。そこで、三つぶ摘みとって、お姫さまの口へひとつぶ、ひとつぶ、しばって飲ませました。お姫さまは、たちまち元気になりました。

皇帝は大喜びしました。そして、マコトに、黄金をどっさりあたえ、おつきの者をつけて、家まで送らせました。

マコトの妻は、死んだと思っていた夫が帰って来たので、幽霊じゃないかとおどろきました。マコトは、何もかも語って聞かせて、今はどんな大金持ちになったかを話しました。そして、大きな屋敷を建てて、幸せに暮らしました。

あるとき、屋敷の前をワルが通りかかりました。そして、マコトが、ちゃんと両目があいていて、とてつもない大金持ちになっているのを見て、びっくりぎょうてんしました。

「おまえ、いったいどうしたんだい」

マコトは、

「いつもおまえさんにいっていたじゃないか。神さまとともにいれば、いざというとき助けてくれるって」といって、洞穴の中で悪魔たちの話を聞いたこと、そのおかげで、目が見えるようになり、ロシアの皇帝のお姫さまを助けてほうびをもらったことを話しました。

ワルは、心の中で、

「よし、今晚、その洞穴に行つてやろう。そうすれば大金持ちになれるぞ」と考えました。

ワルは、マコトから洞穴のありかを聞き出して、夜になると、出かけて行きました。洞穴の茂みのおくにかくれていると、悪魔たちが集まって来ました。そして、あの悪魔がいました。

「えらいことになった。このあいだの驟馬ひきがおれたちの秘密の話を聞いてしまったんだ。そいつは、目が見えるようになったばかりか、ロシアの皇帝の娘の命まで救ってしまった」

大魔王は、それを聞くと、

「だからいったらう。茂みに耳あり石に目ありと」といいました。そして、

「急げ、このあたりの茂みをみな焼きはらってしまえ」と命じました。

こうして、茂みにかくれていたワルは、灰になってしまいました。ワルは、悪魔がどのようにして助けてくれるのかを学んだのでした。

おしまい

村上郁再話

資料『イタリア民話集下』カルヴィーノ／川島英昭訳／岩波書店